

第六回シリーズフォーラム「東京の地域学を掘り起こす」

川越のまちづくりと歴史的建造物の活用

日時 二〇〇八年一月二四日(月) 一五:一五～一八:〇〇
会場 茶陶苑

開会挨拶	陣内秀信	3
報告 ① 川越のまちづくりの軌跡	荒牧澄多	5
報告 ② 川越暮らしの魅力	藤井美登利	10
報告 ③ 「歴史的建造物の現状と活用提案」及び 「あるってアート2008における暫定活用事例」	内田雄造十草野律子	15
コメント	森まゆみ	20
ディスカッション	陣内(司会)十荒牧十藤井十内田十森	21
江戸東京フォーラム話題一覧他		27

主催 財団法人 住宅総合研究財団／東洋大学工学部現代GP
後援 川越市教育委員会／NPO法人川越蔵の会

フォーラム趣旨

川越市には、小江戸川越ともいわれる蔵造りの町並みをはじめとして、明治、大正、昭和前期に建設された、《旧織物市場》《旧鶴川座》《旧鏡山酒造》《旧八十五銀行本店（現埼玉りそな銀行川越支店）》《聖公会川越キリスト教会》など、歴史的な建物が数多く存在します。

今日、川越市ではこれらの歴史的建造物を活用したまちづくりが行われています。

今回のフォーラムは、まず、参加者は主な歴史的建造物の見学をします。その後、フォーラムで川越のまちづくりに関わるメンバーから、まちの現状や計画について多面的な立場からの報告を受けます。そして、川越のまちづくりの可能性を議論していきたいと考えています。



開会の挨拶

法政大学デザイン工学部

陣内秀信



皆さまこんにちは。本日は大勢お集まりいただきまして、ありがとうございます。

今回のフォーラムは、長らく江戸東京フォーラムを牽引してくださった、東洋大学の内田雄造先生から、「ぜひ川越に来てください」というお誘いをいただき、川越で開催することになりました。

川越といえば、特に関東圏において町並みを大切にしたまちづくりで有名です。つねにその道のトップランナーとして、話題を提供し続けてきました。そこでぜひ、最近の成果を含めて、川越の歴史とそれを活かしたまちづくりの展開を勉強させていたどうかという事で参りました。

私はイタリアで数年間勉強したのです

が、帰国してまもなくのころ、何度か川越にお邪魔する機会がありました。川越には、建築史や都市計画、都市づくりに携わっているさまざまな人が来ています。東海大学の羽生修二先生、千葉大学の福川裕一先生もそうです。

本日は、江戸東京フォーラム委員会の重要なメンバーである森まゆみさんに、川越との付き合いが大変長いことと、お越しいただきました。また、地元代表として、NPO川越蔵の会の荒牧澄多さん、藤井美登利さんにも来ていただきました。

荒牧さんは、東京都立大学の石井昭研究室出身で、若い頃からまちづくりをライフワークとしておられます。私は、石井先生にイスラムの研究の面白さを教えていただきました。五〇日間イランをともに旅したこともあり、大変お世話になりました。

藤井さんには、五月に成立した通称「歴史まちづくり法」にちなんで行われたシンポジウムに、全国の代表として来ていただきました。このように、本日のシンポジウムには大変素晴らしいパネリストとコメントータの方々をお迎えしております。

川越が切り開くまちづくりの可能性

皆さま方にお話ししたく前に、私なりの川越の見方を簡単に申し上げておきたいと思います。川越は、蔵造りの素晴らしい町並みで全国に知られています。私は数年前に、電柱、電線が取り払われたメインストリートを見てとても驚きました。また、川越を支え彩ってきたさまざまな建物は、地元の方々の努力で徐々に発見、再評価されています。こうした試みによって、奥深く眠っていた歴史的資産、生活文化が掘り起こされ、歴史的価値や文化的アイデンティティを持った物件が広がり、まさに川越の歴史そのものがつくり上げられていきました。これは大変なことだと改めて思います。

このフォーラムの前に見学会をしました。特に川越以外から来られた方々は、本日、普段からよく勉強し実践なさっているガイドの方々に導かれて、川越の奥深くまで知ることができたのではないかと思います。私も感動の連続でした。

個人的に見学しました《旧鏡山酒造》は、市が買い上げ、いままさに活用のための修

復工が行われていましたが、これは素晴らしい文化拠点になると思います。

《旧織物市場》も市が買い上げたのですが、藤井さん含め多くの方が運動を起こして、座り込みまでして守ったという感動的なお話しをうかがいました。

《旧鶴川座》という映画館も大いに文化発信の基地になると思います。

そして《山崎家別邸》《鶴屋別邸》のあの和洋混ざった庭の素晴らしい建築空間は、ゲストハウスにでもしていただければ海外からのお客さまも大変喜ばれるのではないのでしょうか。路地裏を含めて回遊性が出てきていることには、本当に驚きました。これは日本のまちなかでも突出して進んだまちづくり、歴史を活かしたまちづくりに繋がっていくのではないかと思います。

かつてはヨーロッパがこのようなまちづくりを推進してきたのですが、日本流のやり方が求められるなかで、川越が切り開い

てきた道は、かなり面白い、実験的な、大きな可能性を見せているのではないかと思います。

川越を運動論的に捉えてみますと、一九七二(昭和四七年)に、ある蔵を取り壊す計画があり、最初の保存運動が起こりました。そのころ私はまだ大学院で勉強していましたから、本当に早い時期から蔵造りのまちを守ろうとしていたわけです。

また、文化庁の建造物の点検をどうするか、あるいは、今後建つ新しい建物を視野にいったデザインコードの設定、誘導についてなど、さまざまな曲折や段階があったとうかがいました。まちづくり会社をつくるという構想など、内部の意見対立もあつたかもしれませんが、つねに振り回されずマイペースでここまでやってこられたようです。

東京などを見てみると、一九七三(昭和四八年)のオイルショック以降、日本の都市

は元気がなくなつたように思いますが、その時期に歴史や文化が掘り起こされました。江戸東京ブームが来たわけです。しかし一九八〇年代にバブルがはじまると、今度は古いものがどんどん壊されてしまっています。その後も、経済の浮き沈みとともに、都市や建築への眼差しは変化を繰り返します。こうした目まぐるしい状況の変化のなかで蓄積され、深まってきた江戸東京学を継承していくのは難しいことですが、そのようななかで、川越は一貫して歴史的まちづくりを实践してこられました。本日はそれについてもぜひうかがいたいと思います。

じんない・ひでのぶ

一九四七年福岡県生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了。工学博士。イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学に留学。著書に『東京の空間人類学(筑摩書房)』、『水の東京(編著、岩波書店)』、『ヴェネツィア——水上の迷宮都市』(講談社)ほか。

川越のまちづくりの軌跡

NPO 川越蔵の会

荒牧澄多



本日はNPO法人「川越蔵の会」に所属するものとして、また、学生時代から川越のまちづくりに関わってきた者として、川越の現在までの軌跡をご案内させていただきます。と思います。

一〇月に開催されました、国の重要無形民俗文化財「川越まつり」は、二日間で百万人ほどの人出がありました。本題からは少しずれますが、実は、この川越まつりのコミュニティが川越のまちづくりに非常に強く関わっています。祭りというコミュニティがなければ、町並み保存はうまくいかなかったかもしれません。川越のまちづくりは、気運が盛り上がり、そしてそれが潰されるということを何回も繰り返してきた

のですが、最終的に伝統建造物群に意思表示をしたのは、地域の祭りを中心としたコミュニティのある自治会だったのです。

川越まちづくりの歴史

さて、川越のまちづくりの基礎は、一六三八(寛永一五年)年の大火後に松平伊豆守信綱によって行われた「十カ町じゅうかちょう四門前しもんぜん」と呼ばれる町割です。おそらく中世からあったまちを近世の町割制度で制度的に整備したものと考えられます。そして、一八九三(明治二六年)の川越大火の後に、現在の蔵造りの町並みが成立しました。それ以前は板葺き屋根という非常に燃えやすい町家が多く建っていました。

戦後になると、さまざまな商業施設が駅に近い南の方に移転し、蔵造りが多く残る北側がさびれ始めます。

一方、東京オリピックから大阪で開かれた万国博覧会にかけてさまざまな歴史の建造物が壊されるなかで、文化庁では緊急民家調査を行います。全国の都道府県の古い民家や町家をもう一度調べなおして、それを文化財として指定し守っていくとうとするものです。埼玉県では一九六九

(昭和四四年)に調査がなされました。それによって、一九七一(昭和四六年)には、川越にあった《大沢家住宅》が、日本最古の蔵造りとして、重要文化財に指定されました。より古い民家は全国にたくさんありますが、蔵造りとしてはこれが最も古いものだとわかったのです。蔵造りは、江戸で生まれ関東地方に広まった町家の建築様式です。当時、私は中学生でしたが「ボロツちい蔵だなあ」と思っていました。一番貧弱でみすぼらしい蔵だと思っていたものが実は一番古かったのです。その後、現在の《蔵造り資料館》の建物が売りに出されようとしていたところ、周辺の人たちの活躍によって保存されることになりました。ただしその時は市が保存したままで、料亭に貸し出すかどうかで一悶着があったように思います。

一九七〇年代前半には、倉敷や金沢で景観条例が成立するなど、全国でも古い町並みを残す活動が生まれています。川越では、川越青年会議所の人たちが、蔵造りを活かしたまちづくりをテーマに、一年間でしたが活動を行いました。青年会議所は一年ごとにテーマを決めて活動するので、この時はその一年で終わってしまったのです

が、これが後の伏線にもなりました。

その後、一九七四（昭和四九）年には、建築学会関東支部主催で「歴史的街区再生計画——川越」という設計競技が行われます。翌年、文化財保護法が改正になり、「重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）」制度が生まれました。それまでは町並み保存はどちらかというと建築史の先生が入り込んでいる例が多かったのですが、このコンペでは、都市計画や建築デザインを専門とする人たちが、大学院生クラスから卒業したての若い人たちが多く参加していました。この結果、川越は単なる歴史的な建築物の保存活動の場ではなく、都市計画家や建築家と町並みとの出会いの場となっていたわけです。

川越は、一九七五（昭和五〇）年に「伝統的建造物群保存対策調査」を行うのですが、この時は商店街から反対がありました。理由のひとつは、釘一本打てなくなるのは困る、というものでした。お店というのは、看板を取り替えたり店内の構成を変えたりして、新しいお客を獲得するわけですが、それができないと商店街はやっていけません。また、このころの観光といえば土産物

品と名所旧跡が中心で、ようやく町並みに目が向いてきた頃です。川越のような明治時代にできた新しい町並みなんかは観光客が来るわけがない。来ても土産物品など何もない。そう言われていたころでした。

一九八一（昭和五六年）、一六棟の蔵造り商家が市の指定文化財になります。この当時川越では、建造物の登録制度が望ましいのではないかという議論を盛んにしています。しかし、まだ日本のどこにも登録制度はありませんでした。蔵造りが市の指定文化財になったことで、これがのちに町並みの核になっていきます。この指定は、外観保存を重視し、内部改変は自由という、文化財としてはいい加減な指定ですが、いくつかの家が補助金を受けて修理をすることになり、逆に歴史的建造物の見直しに直接的に影響を与えることになりました。

蔵の会の発足

一九八三（昭和五八）年に「川越蔵の会」が発足します。このころには、一九七〇年代前半に勉強をしていた青年会議所の人たちも四〇代になり、商店街の中核を担う世代になりました。また、一〇年前の歴史的

街区保存計画の設計競技に参加した学生たちも研究者や大学の助手になりました。そのとき入選した福川裕一さん（現千葉大学教授）も、大学の助手になりました。そのような若手研究者と、商店街の中核になってきた人たちが「蔵の会」を発足させたのです。ここに私は若手の市役所職員として参加させていただきました。

「蔵の会」では、まず会員のお店を一軒一軒診断したり、まちづくりをどういう方向で進めていくべきかというワークショップを毎月一、二回開催しました。これが基になり、蔵造りの町並みを擁する一番街商店街では中小企業庁（当時）から発表された「コミュニティ・マート構想」に応募し、一九八六（昭和六二）年にそれが採択されたのです。

これを契機に、一番街の活性化事業を商店街として調査するようになり、一九八七（昭和六二）年に一番街商店街に「町並み委員会」が生まれます。そしてその翌年には、「町づくり規範」というルールを制定しました。これは、あくまで商店街がつくったルール・ブックです。

これに呼応するかのように川越市では

「川越市都市景観条例」を一九八九(平成元)年に施行いたします。これは、県内でもいち早くつくられた景観条例だと思えますが、やはり伝建地区指定という問題を抱えていたため、なごらくほとんど機能せずに来たのが実情です。

当初は、伝統的建造物群保存地区指定のための条例と一体化したものを考えていましたが、やはり伝建地区の話を地域に持ち出せないでいました。

しかし、ちょうどその頃、埼玉県の商工振興サイドから商店街に補助金が出て建物の改装が進み出します。一九七五(昭和五〇)年の段階では、商店街は歴史的町並みを拒否していたのですが、一〇年経ち、人が変わり、周りの社会状況が変わることによって、歴史的町並みを活かしたまちづくりが実践されるようになります。一九九二(平成四)年に電線が地中化されるなど、まちがきれいになっていくわけです。

この年、この勢いによって川越市は、伝統的建造物群保存地区の指定と拡幅が計画されていた都市計画街路の変更についてまちの人たちに説明するのですが、自治会から白紙撤回を要求されます。しかし川越の

場合、ただ単に白紙撤回で終わらないのがいいところで、これをきつかけに「^{じつ}十カ町会^{かひ}」という自治会の勉強会が始まります。この時の自治会長は当時市の文化財保護審議会の会長をされていた方なのですが、伝建地区に想定されている地区だけの問題ではなく旧城下町も全体の問題として考えようということ、その勉強会を自主的に始めます。

一九九五(平成七)年には、一番街商店街に隣接する大正浪漫通りでも「大正浪漫委員会」を発足させ、さまざまな景観整備が始まります。

このようにまちづくりの気運が高まる最中、これまでなかったような高層マンションの計画が複数も持ち上がりました。これでは、いままでの自分たちのまちの守り方では不十分だということで、伝建地区指定を受容するようになってきます。最も町並みが残る地域を伝建地区とし、その周辺地域を「都市景観条例」に基づく都市景観形成地域として指定することで、伝建地区だけが突出するのではなく、旧城下町地域を一体として、皆が共通で理解するエリアとしました。

都市景観重要建築物は、あくまで景観条例に基づく川越市単独指定です。だいたい五〇年経過したものについて指定していますが、現在六五件あります。指定した建物には五百万円の補助金を出しています。景観指定と登録文化財は法制度が違うことで、両方併用でき、工事費については景観指定の補助金から出して、それ以外の税制上の免除は登録文化財を活用していただくということにしています。現在一〇件登録文化財があるうち、六件は併用で、残りは市が持っている《旧鏡山酒造》の三件と伝建地区にある《旧八十五銀行本店(埼玉りそな銀行川越支店)》です。ですから民間が持っているものはすべて両者のいいところ取りをしています。文化庁は、登録文化財になかなか補助金を出さないなどと言われていますが、川越市は逆にこれを併用することによって、国交省のまちづくり交付金を導入しています。

――町並み委員会――

町並み委員会が一番街商店街のまちづくり諮問機関で、商店主・研究者そして行政がオブザーバーとして参加し、商店街主催



写真1 《Fギャラリー》
写真1、2、4撮影：荒牧澄多



写真2 《茶陶苑大蔵》



写真3 1988（昭和63）年頃の川越の町並み
提供：川越市



写真4 指定文化財として修復された蔵造り

物の分棟化が望まれているのですが、《Fギャラリー》は、ギャラリー棟、店舗棟、飲食棟に分かれ、そのあいだに中庭を設けています。外観は現代建築ですが、まちのルールはすべて忠実に守っています。

で運営されています。蔵の会も、地域のまちづくり市民団体として主に建築関係者からなるデザイン部会が中心となって参加しています。この委員会は、商店街の自主的

活動なのですが、現在では伝建地区全体の事前審査機関的な役割も果たしています。ここでは、地区内の新築や改修等のデザイン

についての議論を主にしていて、そこで行政の担当者は話を聞いていて、町の反応を見ながら伝建地区としての許可をだすこととなります。

「まちづくり規範」は全部で六七項目あるのですが、規制するのではなく、望ましい形を示しています。また、建物だけでなく街区に対することまで考えているのが特徴です。「町並み委員会」はあくまで商店

街内部の自主機関ですが、これに基づいて現在の伝建地区のベースが成り立っていると考えていただいていると思います。

●《Fギャラリー》

写真1の《Fギャラリー》は、安藤忠雄さんの弟である北山孝二郎さんが設計した鉄筋コンクリート打ち放しの建物です。四間・四間のルールというものがあるので、この地区では、大体この割り付けに沿って店と住居と中庭が同じような場所に位置しています。この建物も通りから一スパンを七・二メートル（四間）として設計されており、ルールが踏襲されています。さらに、「規範」の中には「棟を分ける」「その規模に合わせた建物をつくる」とあり、建

●亀屋山崎茶店《茶陶苑》

写真2は、本日の会場でもある、亀屋山崎茶店《茶陶苑》の大蔵です。ここは、もともと味噌の醸造に使っていたものです。それがお茶屋さんの倉庫になり、そして二〇〇五（平成一七）年美術館として開館しました。頻繁にコンサートを行ったり、陶磁器のコレクションを展示しています。また、このようなフォーラムにも使わせていただいています。

――町並みの移り変わり――

ここで町並みの移り変わりを見ていきましょう。写真3は、一九八八（昭和六三）年頃の川越の写真です。現在のNPO川越蔵の会の理事長のお店になっているので

すが、それまでは真っ黄色に塗られた看板と大きな土瓶の形をしたネオンがありました。それを「蔵の会」ができた後に取り払って、茶色に塗りました。

写真4は、先ほどと同じ家ですが、最初に市の指定を受けた一六棟のなかの一棟です。一千万円以上の補助金を受けて修理しました。ご当主は現在五〇代ですが、彼が三〇代の時に看板を下ろして現在の形にしました。商店の看板を下ろすということはとても大変なことですので、家のなかで葛藤もあったようですが、まわりが説得して実現しました。

一九九二(平成四)年に電線が地中化されます。現在では町並みの写真が国交省のホームページでも紹介されていますが、実はこの電線地中化は、都市計画街路の拡幅計画が入っていたのに拡幅せずに地中化したということで、国交省からひどくおこられたそうです。

また、表通りから西の小路へ一〇メートルくらい入ったところに黒い御影石で横断線が引かれています。一九六三(昭和三八)年に行われた都市計画街路の拡幅計画線がその線で表現されています。計画線があった

ため、表通りの西側に伝統的な建物が多く残っているわけです。

一九九九(平成二)年の伝建地区指定にあわせて表通りの拡幅計画は、現状幅員のままとする変更を行いました。その結果、表通りに歩道をつくれなくなったので、周辺の狭い道を都市計画的に歩行者用道路と認めることによつて表通りの歩道がない分を補おうという考えです。菓子屋横丁やお寺の参道や鐘つき通りですね。

川越の場合、ただ単に道を整備するだけでなく、まちの人たちが道と建物のあいだなどを整備してくれて、連続感が出ています。道路の際に面した部分のデザインをまちの人たちが気づかっています。単に道路を整備しただけでは道路空間はよくなりません。路面がきれいになるだけです。看板にしても、それぞれのお店の特色を活かした看板が必要になります。エアコンなども人目につかないように隠しています。自動販売機もシチュエーションに関係なく置かれたら汚いのですが、初めから自動販売機を置くことを前提に設計すると、町並みに溶けこんで違和感も少ない。工夫さえすれば、現代的な異物があってもそれなりに見

せることは可能です。

《旧鏡山酒造》にはマンション建設が予定されていましたが、市民の要望で川越市が買い取りました。明治蔵、大正蔵、昭和蔵、瓶詰作業場、倉庫があり、現在四億数千万円かけて川越市で改修し、指定管理者によつて商業施設としてよみがえる予定です。実は、ここでは蔵の会と、アルテクトルプというアートのボランティア・グループが、協働で川越市に先立って活用実験をしています。市民の感覚で活用実験することで、建物、施設の存在を市民に広く知っていたかどうかというイベントです。《旧織物市場》も同じように市民運動によつて保存が決まりました。鏡山と同じように、市から建物を借りて、活用実験を行っています。

以上で報告を兼ねて発表を終わります。

あらまぎ・すみかず

一九五六年埼玉県川越市生まれ。東京都立大学大学院工学研究科修士課程修了。川越市職員。NPO川越蔵の会員ほかいくつかの市民団体会員。NPO全国町並み保存連盟理事。共著に『川越の蔵造り——川越市指定文化財調査報告書』『景観法と景観まちづくり』。その他の活動に『都市問題』『別冊造形』への執筆、川越市立博物館所蔵の模型の設計など。

川越暮らしの魅力

藤井美登利

川越むかし工房



私は川越でタウン誌『小江戸ものがたり』を発行しています。本日のコメントータである森まゆみさんたち(谷根千工房)が発行している雑誌『谷中根津千駄木(谷根千)』の長年の愛読者で、川越というまちでもいつか『谷根千』のような雑誌をつくりたいと思っています。

二〇〇〇(平成一二)年頃、森さんたちが川越のまちづくりシンポジウムに来られた際に、私は子どもをベビーカーに乗せて会場に行き、「川越で雑誌をつくりたい」と相談しました。そのとき、山崎さんというスタッフの方が「川越のようなく所に町雑誌がないのはもったいない」と言ってくさいました。これは松平信綱が「川越のよ

うな城下に祭りが無いのはもったいない」と言ったのとほとんど同じで、その言葉に背中を押され、雑誌をつくり始めました。二〇〇一(平成二三)年の第一号から始まり、現在第一一号まで発行しています。本日は雑誌づくりをしながら出会った人や、川越の実際の暮らしぶりのなかからお話ししたいと思います。

川越まつり

私は一九九一(平成三)年に観光客として初めて川越を訪れました。当時は浅草に住んでおりまして、英国航空の乗務員として一週間ごとに東京とロンドンを往復する仕事をしていました。バブル全盛期の少し前で、浅草には仁丹塔など、まちに不思議な建物がまだあった時代です。しかし、六区の映画館のあたりがどんどん変わりはじめ、一週間東京を留守にすると町並みが変わっているのです。一方、ロンドンには『シャーロック・ホームズ』の映画のロケができるほど、昔の町並みが残っています。ひいおじいさんが見た建物を孫も子どもも見ている。そんな時間の連続性を感じました。近代建築がどんどん壊されるまちと、

かたやずっと時間のつながりのあるまちの両方を一週間ごとに往復していますと、情緒不安定と言いますか、喪失感を感じるようになりました。その時偶然川越を訪れたのです。東京・池袋から三〇分こんなまちが残っていることに驚きました。そして川越に移り住むことにしました。川越の方々には「景観難民で東京から越してきました」と申し上げました。

川越のまちは、一六三八(寛永一五)年に松平伊豆守信綱の町割りによって十カ町四門ひとつの上松江町(現在の松江町二丁目)というまちに越してまいりました。このまちは一六三八(寛永一五)年から川越まつりに参加しています。観光客で来た時には、やはり蔵造りの建物など、その外観に魅かれていたのですが、川越のまちに住み始めるようになって、今度は川越の人の暮らしぶりに驚くようになりました。かつて住んでいた浅草にはお神輿の祭りがありますが、マンションに住んでいるような一般の住民はなかなかお神輿には関わられません。しかし川越の場合は山車祭りなので、子どもからお年寄りまで祭りでの役割があります。各町

内のシンボルとなるお人形を上に乗せた山車は、先頭を子どもが歩いて、大体約百人の人が山車を引きます。

山車には三百近い部材がありますが、釘を使わず全部手作業で組み立てています。お神輿と違って山車は祭りの前の日に組み立て、終わった後に解体します。この作業には大工さんや鳶職とともに町内の人出が必要で、そしてこの部材を並べて磨くのは町内の女性の仕事になっています。組み立てにもお金がかかりますから、私の町内は二年に一度祭りに参加しています。このようなかたちで、多くの人が関わらないと

祭りが運営できないという仕組みがあるわけです。

また、祭りには会所も必要なのですが、ご自分の家を提供してくださる方がいらっしやいます。歴史的建造物が町内にあるかないか、祭りの時は今年はこの家が会所になるのが各町内で話題になったりします。祭りにふさわしい会所があるとその町内の格式も上がるようです。

写真3は、「会所開き」の様子です。「会所開き」の神事は祭りの始まる前日、氷川神社から神職を呼び、氷川大明神の軸を飾って執り行います。祭りのお囃子は近郊



写真1 江戸の天下祭りの面影を残す川越祭・華麗な山車が巡行する
提供：小江戸川越観光協会



写真2 町内総出で職人と山車を組み立てる



写真3 松江町2丁目の会所開き
写真2・3・5・7 提供：川越むかし工房

の農家の方々が演奏するのが川越まつりの伝統的なやり方です。しかし、東京オリンピックを境に農村の方々が出稼ぎに出てしまい、お囃子は成立しなくなりました。そこで、町内から農村にお囃子を習いに行つたようです。現在では、私の町内でも、おじさんたちが子どもたちにお囃子を教えています。このように、祭りがお囃子を継承させるひとつのシステムになっています。かつて、祭りの山車は町内の旦那衆がお金を出してつくっていました。近郊の農家の方はまちに肥料を買いに来て、そうした取り引きのある町内でお囃子を演奏していま

した。農村でつくった農作物はゆかりのあ
る町内に売りに来るといふ農村と都市の交
流システムが江戸時代にはあったわけだ
すね。

私は、祭りが新しい住人を受け入れるひ
とつのシステムになっていることにとても
感激しました。もしこれが山車ではなく、
お神輿の祭りだったら、そこまで手間は掛
かりませんから、新しい住人が関わること
のできる要素は少なかつたと思います。し
かし山車の祭りであることに加えて、若い
人が少なくなっていますので、マンショ
ンの新しい住人も歓迎される風潮があり
ます。

——『小江戸ものがたり』と職人——

私の編集する『小江戸ものがたり』は一
冊三百円で販売しておりますが、同名の
ホームページも開設しています。この冊子
でやりたかつたことは、「東京の忘れ物」が
見つかるまちとして川越を発信すること、
川越の昔と今をつなげること、そして私の
ような新しい住人と地元の人をつなげるこ
とでした。川越にずっと住んでいる方
にとっては、祭りも蔵造りの建物も当たり前

のものなので、「そんなに珍しいの？」とよ
く聞かれます。しかし、私のように東京近
郊のベッドタウンで育ち、職人さんに会っ
たこともない者からすると、本当に色々な
ものが残っていると感じます。

そして、外国の真似をしなくても、充分
生きていけるということ、素敵な素材が沢
山あるということ伝えていきたいと思っ
ています。

よくヨーロッパ、特にイタリアには広場
や公園があるとされますが、川越では
神社仏閣がその代わりです。川越の公園
デビューは神社やお寺の境内に行くこと
です。

『小江戸ものがたり』第八号では職人を
特集しました。タイトル職人の小林さんは、
ひいおじいさんが亀屋さんの入口のアーチ
の煉瓦をつくつたとおっしゃっています
た。とび職の松本さんや、「つまみかんざ
し」という日本髪があつた時代の装飾品を
つくる職人さんもいます。

川越の喜多町には桶屋さんが一軒だけ
あつて、いまでも桶をつくっています。川
越まつりには、自分の名前を書いた提灯を
持つて参加する風習が残っていますので、

2009年
版
第十二号
特集 埼玉箱物散歩
埼玉箱物ミッド
田沼足袋めぐり
ちんちん電車があつた頃
箱もの職人さん
川越の表裏
りんごの先川用船



図1 冊子『小江戸ものがたり』表紙(右)とウェブサイト(左)
<http://www.koedomonogatari.com>

提灯屋さんの仕事もまだあります。
石原町にいたる鍛冶冶の伊藤さんは、玉鋼
からノコギリをつくっています。いま法隆
寺の大工さんなど、全国各地のこだわりを
持つ大工さんから注文、修理の依頼が来て

いるそうです。このような方々のお仕事を、まちを歩きながら見る事ができるといのも川越の魅力だと思います。

現在、松江町二丁目の山車は飛騨高山の職人組合に修理をしてもらっています。以前、川越幸町の山車を修理をしてもらったときに、交流ができたようです。それがきっかけで、川越まつり会館で飛騨高山の職人さんの映画を上映し、職人トークを企画しました。この映画のナレーションをされているという事で、三國連太郎さんも来て下さいました。山車をつくった川越の大工棟梁、幸町のとび頭、飛騨高山の野

鍛冶の方、高山の職人組合の理事長である宮大工の八野さんのお話を伺いました。

町内の山車修復は四千八百万円かかります。三年前に川越氷川祭が国の重要無形民俗文化財に指定されましたので、補助金が国からも出るようになりました。それでもやはり七五〇万円を町内が負担しなければなりません。それを一九〇世帯で負担するのは大変なことなのですが、山車のように引き継いでいけるものがあるということは幸せだとあるまちの方がおっしゃっていて、その言葉に感銘を受けました。

次に《旧織物市場》の話しをさせていただきます。

写真4は、開業時の《織物市場》を写したものです。一九一〇(明治四三年)に建てられたので、百年前の写真ですね。市場には子どもたちが沢山いて、ほのぼのとした雰囲気です。とても素敵な写真だと思います。写真は、現在の《旧織物市場》の写真です。ほとんど百年前と変わらず、当時のまま残っています。

約七年前になりますが、二〇〇一(平成

— 《旧織物市場》と保存運動 —



写真4 明治43年開業当時の川越織物市場
提供：川越市立博物館



写真5 毎月第4日曜日に市民グループが見学会を開催



写真6 毎年7月に中庭で開催する夕涼み会
撮影：中沢博



写真7 昭和8年築の栄養食配給所。近くの織物工場用に給食を作っていた

一三年に《旧織物市場》を壊してマンションを建てるという計画が立ち上がりました。解体屋さんが「来週火曜に壊すから」と、町内をまわってきました。蔵の会、町内会、立門前商栄会という商店街、川越唐棧愛好会の四団体で、織物市場を守る会をつくり署名運動を始めました。大変なご縁だと思のですが、町内にマンション問題に精通した腕利きの弁護士さんがいらっしやいまして、町内一致団結してこの織物市場保存運動を行うことができました。

川越は江戸時代から織物とお米の集散地として栄えており、木綿の織物の集積した富で、蔵造りを建てました。一八九三明治二〇年の大火のあとに木綿織物買継商、呉服問屋の方々が大変多くの蔵を建て、それが今に残っています。織物が川越の蔵造りやまちのルーツになっていることも発信していきたいです。

マンション計画が持ち上がった約一カ月後には、一万三千名の署名を集めて川越市に提出しました。裁判所に行ったり、座り込みどころではなく泊まり込みもしました。木造建築なので火事が恐いからと、町内の男性が布団を持って泊まり込み、ここ

から会社に行った方もいらっしやいました。また、昼間は子どもと女性がこたつを囲んでここをどのように使うかという話もしました。その後、夜中にガラスを割られるような事件もあったのですが、一年後には川越市が買い取り、建物の寄贈を受けて現地で保存が決定しました。そして四年後には川越市の文化財に指定されました。町内の皆が協力し、駄目で元々でやってみようと、この活動を始めました。普通の市民が始めた運動で建物がそのまま現地に残り、その後文化財になったということは貴重な例だと思っています。

毎月第四日曜日に公開し、夏にはここで夕涼み会を行います。また、「川越きもの散歩」という、きものでまちあるきをする会を主宰しています。この《旧織物市場》でも着物で集まって活動をしています。《旧織物市場》には三國連太郎さんも来られて、大変喜んで下さいました。『無法松の一生』という映画のロケ地にもなったことがあり、ここで三五年前にロケをしたというお話をしてくださいました。

写真7は、《栄養食配給所》です。これは、一九三三(昭和八)年につくられたもの

で、近隣の織物工場の人たちに給食をつくり運ぶ施設です。《旧織物市場》の後ろにマンションが建っているのですが、このマンションと《旧織物市場》の空間の間には百年の時間差があります。《旧織物市場》の中庭に立つて後ろのマンションを見て、「ああ、百年経っているのだな。百年の間に私たちの生活はすごく変わったのだな」と感じます。百年前は皆着物でおりりましたがもう洋服の時代になってしまいました。色々私たちが置いて来たものを、この《旧織物市場》の中庭に立つと考えることができず。そのような空間を川越のまちに残しておきたい、そしてその空間を多くの方に味わっていただきたいと思っています。

ふじい・みどり

一九六一年東京生まれ。ブリティッシュ・エアウエイズ乗務員として欧州アジア便に乗務。二〇〇一年より川越の町雑誌『小江戸ものがたり』編集発行人。埼玉の養蚕農家を支援し、きものでまちづくりをすすめる「NPO 法人川越きもの散歩」代表。東京国際大学言語コミュニケーション学部非常勤講師。

「歴史的建造物の現状と活用提案」 及び「あるってアート2008」 における暫定活用事例」

東洋大学ライフデザイン学部

草野建築設計事務所

内田雄造

草野律子



—— 都市・川越をめぐる状況 ——

内田——私は一九七〇（昭和四五）年から東洋大学に勤め、比較的早い時期からまちづくりに関係してきました。現在は川越市の都市計画審議会会長をしており、行政的な立場から川越をどのようにしていくか考えています。本日はまちづくりの立場から歴史的建造物の活用についてお話しします。

最初に、都市・川越をめぐる状況を見ていきたいと思います。川越に来て、観光客が多いと感じになったことと思います。実際、観光客の数は増えているのですが、実は、

商店街の売り上げは落ちていて、その面ではかなり厳しい問題があります。

つい最近、副都心線が開通しました。池袋、新宿といった副都心との関係、あるいは埼玉県内では大宮、川口、所沢といったほかの都市との関係、それから東上線の奥の方にある坂戸、鶴ヶ島といった、いままでは後背地だったところがそれぞれ自立しつつあり、そのようななかで、都市・川越は商業的には難しい問題があると考えています。

もうひとつの問題に、郊外のショッピング・センターとの競合があります。

また、荒牧さんのお話にもありましたが、市街地が分断されています。川越駅周辺のクレアモールには若い人が非常に多く、北部の一番町を中心とした場所は比較的年配の方が多いのです。人の動きがかなり対照的です。そしてそのちょうど中間にあたる新富町のあたりがかなり衰退してきているのです。最近少し活性化してきましたが、そのような問題があります。

—— 川越にある歴史的建造物 ——

今年の春、市民の手で川越にまちづくり

会社がつくられました。この会社は、まちをマネジメントしていくという発想を非常に強く持っています。郊外のショッピング・センターの場合ではテナントをどうミックスするか、フードコートやシネマ・コンプレックスをどの程度にするかなど、綿密に全体的な計画を練っています。商業施設だけではショッピング・センターに川越は勝ちようがない。ですから、まちの持っている魅力を総動員して頑張りたいという思いから、タウン・マネジメントが考えられています。

そのなかで、まちづくりの一環としての歴史的建造物の活用について考えたいと思います。例えば、刃物専門店「まぢかん」は本来の蔵造りをそのままうまく活用している例です。《旧小林家住宅》の「くらづくり本舗」は、前がお店で裏が食堂になっています。「もち亀屋」の場合、お店があつて、ほかにギャラリーとして裏の蔵を使っています。「山田屋」は裏を喫茶店として使っています。「金笛」は、平成につくられた蔵造りで、前でお醤油などを販売し、裏でうどん屋をやっています。このように、蔵造りをずいぶん活用してきました。

民間所有のものでは、保岡勝也が設計した《旧八十五銀行》が、いまの埼玉りそな銀行川越支店になっています。これは三階までありまして、どう活用するかが今後のテーマです。ほかにも、《聖公会川越キリスト教会》、亀屋山崎茶店さんなどがあります。《川越商工会議所》は元は銀行でした。

市所有のものでは、《旧鏡山酒造》があります。「鏡山」というお酒はJALのファースト・クラス、あるいはビジネス・クラスで出されていたというくらい由緒ある日本酒なのですが、継ぐ方がおられなくて廃業してしまいました。ここをどう活用するかも問題です。《旧織物市場》は、映画『無法松の一生』のロケ地になった場所でも、もとは長屋として生きてきたところです。明治の末年に織物市場ができて、一九二一（大正一〇）年にならないうちに潰れてしまい、その後権利関係が複雑ななかで結果的に長屋として活用されてきました。また、《旧鶴川座》は蓮馨寺さんの所有地にあるのですが、ずっと劇場、あるいは映画館だったところなんです。一八九三（明治二六）年の大火以前には川越に寄席があったことがわかっ

ています。《旧山崎家別邸》は、もち亀屋の山崎さんが持っていた別邸で、和室も洋室も茶室もある。そのほか、蔵造り資料館である「万文」なども市所有の歴史的建造物です。

市所有の歴史的建造物の活用

先ほど藤井さんからもお話がありましたように、《旧鏡山酒造》《旧織物市場》《蔵造り資料館》などの古い建物には、民間のデベロッパーによって、取り壊してマンションなどにする計画が持ち上がっていました。この計画に反対する住民たちが保全運動を起こし、一種の緊急避難的処置として、これらの建物を市が取得しました。いま、その後の活用の仕方が問われています。

これらの建物には多額の投資がなされているわけですが、今後これらを有効に活用するための私なりのイメージをいくつか出してみたいと思います。

●《旧鏡山酒造》の活用

《旧鏡山酒造》の、明治蔵、大正蔵、昭和蔵については、市は「まちの駅」のようなも

のにしたいと考えているようです。鉄道や観光バスで来た人がまずここに着いて、休憩したり、川越のまちのさまざまな情報をもらったり、あるいはまちあるきのあとで食事をしたり買い物をしたりというような空間です。これはほぼ了解できる場所です。

また、「パーク・アンド・バスライド」といって、マイカーで来る来街者のために、市の郊外に駐車場をつくり、川越の中心部にはそこからシャトルバスで連れてくるという案も考えられます。郊外にもしヨッティング・センターができるのなら、そこで提携して両者の共存の可能性を追求していくのもよいのではないかとも思っています。

まちの駅は、指定管理者制度を活用して、市民と川越市の出資するまちづくり会社を経営していくことになると思います。千葉大学の福川さんとコンサルタントをやっていた西郷真理子さんが「まちづくり会社」というかたちでやらない限り、こういうまちはうまくマネージメントできないとおっしゃっていました。

●《旧織物市場》の活用

《旧織物市場》は、建物としてはB級ですが、産業遺構としては非常に優れたものだと思っています。ですからまずはちゃんと復元して、重要文化財にする必要があると思います。そのためにはお金を惜しむべきではありません。また、重要文化財に指定されたあとどう使うかですが、例えば、芸術家村をつくる。あるいは、代官山などの若い方々と協働してデザイナー・ショップを川越ブランドで展開するということがありえるのではないか。そして、クレアモールに集まる若い方を北部市街地に引っ張り込みたいと思っています。

●《旧鶴川座》の活用

《旧鶴川座》には、正確には分かっているのですが、明らかに花道がありました。現在でも奈落がありますので迫りもあつたと思います。それをうまく復元して、ひとつの川越の文化に育てていけたら面白いのではないかと思っています。

●《旧山崎家別邸》の活用

《旧山崎家別邸》は、皇室の方をはじめ、

いろいろな方が来られたときに使っていたので、ここは川越のゲストハウスとして使うのがよいのではないかと思っています。きちんと維持管理していくためにはお金を取りたいので、会議プラス食事というかたちで貸し出すという方法も考えられます。池袋にある自由学園明日館などはそのようなかたちでうまく活用している例です。お茶室も貸し出して使いこなしたいと思います。

このように、川越では歴史的建造物をうまく使っていこうとしています。これまで、どうしても歴史的建造物というと、きちんと保存するという考えが先に立っていました。それが必要だと思うのですが、まちを運営するまちづくりという立場からすれば、いかに使いこなしていくかが今後勝負になると思います。

— あるってアート2008 —

さて、先日、国土交通省の大きな補助事業である「小江戸川越観光ルネサンス事業」があり、その事業の一環で「あるってアート2008」というアートイベントが開催

されました。このイベントは、川越出身在住の建築家、草野律子さんが事務局を務めるアートとまちづくりNPO「アルテクルブ」が企画・運営しています。ではここで、草野さんにこの活動についてお話をうかがいたいと思います。

草野——私は川越市内でNPO法人川越蔵の会の活動に加わるとともに、アートとまちづくりNPO「アルテクルブ」の事務局を務めています。

「アルテクルブ」とは、英語のアートクラブをイタリア語読みにしたものです。カタカナで「アルテクルブ」と表記してありますが、地域の活動ですので、歩いて来る方々が参加してくださるようという思いから「あるってくるぶ」としゃれています(笑)。

川越生まれの私は、子どもの頃は、藤井さんのお話にありましたように、祭りでは山車を引いておりました。裁着を履き、鼻に白粉を引き、突くと「ジャラーン」と音のするじゃらん棒を持ち、山車の前の縄を引っ張っていました。藤井さんはとても川越の町並みや祭りを褒めてくださいます。が、私は祭りには恐い思い出があります。



写真1 「現代アートと蔵造り職人映像展」での吉田佑子氏のインスタレーション。《旧鏡山酒造》



写真2 「あるってアート2008」での展示。川島商店氷倉庫



写真3 「あるってアート2008」での風呂敷ショップ。《旧織物市場》



写真4 《旧鏡山酒造》の工事用仮囲いの壁画
すべて写真提供：アルテクルブ

いつもは優しいまちのお兄さんが、その日はお酒がはいっていますから怖かったです(笑)。いつの間にか山車にはぐれてしまい、泣きながら家にたどり着いたこともありました。

子どもの頃は、雨が降ると暗く憂鬱な町並みがあり好きではありませんでした。友人の家などもデザイン的に美しいとは思いませんでした。ただ、一つひとつはパランスが悪くても集合すると美しくなります。また、まちの記憶として残してほしいと言う思いがあります。

「あるってアート2008」はインスタ

レーションというかたちのアートを展開したイベントで、市内二〇カ所以上の場所を使いました。そのときの様子をいくつかご紹介します。

●「あるってアート」の展示風景

最初に「あるってアート」の三年ぐらい前に行った「現代アートと蔵造り職人映像展」から紹介します。

このイベントは《旧鏡山酒造》で行いました。写真1は、大正蔵の中で、現代アートのアーティストである吉田佑子さんが行ったものです。「鏡山に婚礼衣装を着せ

たい」というコンセプトで、醸造タンクに白く薄い布と、白いロープをかぶせて花嫁に見立てました。その奥には、給湯器やバイクの廃品を溶接して、一部が動いたり音が出たり光ったりするジャンクアートがあります。また、消火ポンプを器にして生け花を生けました。この試みが今年の「あるってアート2008」というイベントにつながるようになったのです。

次に「あるってアート2008」を見ていただきます。写真2は、新富町の川島という料亭の真向かいにある氷倉庫の中で行った展示です。ここに入ってきた人の動

きを感じて映像が変化するインタラクティブアートです。

また、本町の長屋では、ひょうたんの中に川越のまちの音が詰まっているように見立てて《川越のまちを聴く》という展示を行いました。

《旧山崎家別邸》の庭には、以前は大きな竹が沢山残っていました。私たち蔵の会はここで「竹切り大会」をやりました。まる一日かけて太い孟宗竹を切ったのですが、まだ数本ほど残っていて、それを使ってアートを設置しました。

《旧鶴川座》の玄関前では、絵と写真を合体させたコンピューター・グラフィックスの作品を展示しました。内部では、ルーミア出身で現在ドイツに住んでいる作家が、自分の国とルーツを考え、この川越という場所の文化と言語的制約がどのようにコラボレートするかを試みました。

《旧織物市場》では、四人の作家に参加していただきました。写真3は、風呂敷の展

示の様子です。これは「川越を切り取る」というコンセプトで、川越の色々な場所、マンホールなどありますが、そのようなものを写真に撮って布にプリントしたものを展示しました。また、風呂敷の使い方ワークショップも行いました。

《旧笠間家住宅》は、昔笠間さんという呉服屋さんの店舗だったところで、少し前までは観光協会の事務所がありました。ここでは、『ひよっこりひょうたん島』の人形作家である片岡昌さんの立体造形を展示しました。

写真4は、《旧鏡山酒造》の工事用仮囲いの壁画です。今年の三月末に、この道路を通学路として使っている川越市立中央小学校の生徒たちと作家さん、それから大学生、高校生など、色々な年代の人たちが参加して、壁画ワークショップを行いました。

川越のまちの構造というのは、北の方から明治、大正、昭和、平成という縦のつ

ながりになっています。「あるってアート2008」は、アートという切り口でそれに横のつながりを持たせたと考えています。アートは人と人とのコミュニケーションの媒介になると考えて、十年前に始めたアートサポート活動ですが、今年このようなかたちで地域に広がり元気を出出できたことに、活動の成果を感じています。

うちだ・ゆうぞう

一九四二年、朝鮮・大邱市(当時)生まれ。東京大学工学系大学院建築学専攻博士課程修了。著書に『同和地区のまちづくり論』『まちづくりとコミュニケーションワーク』ほか。日本都市計画学会論文賞、日本建築学会業績賞(共同)受賞。

くさの・りつこ

一九四九年川越生まれ。東洋大学工学部建築学科卒業。一級建築士。草野建築設計事務所パートナー。主な作品に《財団法人東京子ども図書館》《銀座教文館改装設計》《うつのみや痛みのクリニック》《落葉松山荘》など。一九九七年より東洋大学工学部建築学科非常勤講師。二〇〇八年より同ライフデザイン学科非常勤講師を兼務。

コメント

森まゆみ

谷根千工房



私は地域雑誌『谷中根津千駄木』の制作を二五年間続けています。先ほどの発表のなかで、藤井さんが冊子をつくる際に、われわれの雑誌を目標にしたと言ってくれました。大変光栄なことなのですが、逆に私たちにとっては、川越が町並み保存やコミュニティづくりのよい目標になっています。

川越は、私にとっては地域的にも関わりが多いまちです。川越には松平伊豆(伊豆守信綱)の居城であった川越城があります。その知恵伊豆の屋敷は谷中清水町にあります。

幕末までは、江戸城から近いところに、譜代の重要な大名を配するという政策がありました。

しかし維新後、関東の城下町は開発が早く、東京志向になってしまったために、高崎にしても前橋にしても、あまり城下町として脚光を浴びていません。川越は城下町の骨格も残っており、また幕末の川越侯は、戊辰戦争で和平のために非常に活躍していました。

また、天海僧正は私どものまちに寛永寺をつくった人なのですが、この方が川越の《喜多院》の住職をしていらっしゃるなど、さまざまな関係があります。

さて、本日の皆さんの発表を聞いて、川越では、祭りがとても大事な行事であることがわかりました。伝統的な祭りを通じて人々が結びあわされていること、通過儀礼といえますか、年上のものが、その地域のモラルや芸を若い世代に伝えていくという行為がいまも行われていることが印象的で

した。

荒牧さんは、道路計画があったからこそ古いものが残っていたのだと、マイナスのカードをプラスにして色々な活動をやってこられました。

藤井さんたちのように、マンシヨンの建築計画を通して、住民がそこにある建物の重要さに気づいたということも、川越のすごいところだと思います。

また、内田さん、草野さんの発表にあつたように、《旧織物市場》や《旧鏡山酒造》などは、市が住民の声に耳を傾けることによって、残されることになりました。私たちの地域に比べると、地価が異なるということもあるでしょうけれども、行政も相当頑張っているのだなと感心いたしました。

もり・まゆみ

一九五四年東京都文京区生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業、東京大学新聞研究所修了。地域雑誌『谷中・根津・千駄木』編集人。著書に『円朝ざんまい』『断髪のモダンガール』ほか。

ディスカッション

指定文化財と市民の反応

陣内——それではディスカッションを始めます。まず、ご質問がありましたらお願いします。

森——まず荒牧さんに。一九九六(平成八年)にできた国の登録文化財制度という、より緩やかな制度をうまく使って、その登録数を増やすことで伝建地区に繋がられていきます。確かに始めから伝建地区にしようとする、相当な反発が考えられますが、市の指定を積み重ねていったときのまわりの反応はどうでしたか。

荒牧——指定に関しては、行政が率先して動いているのではなくて、まちの方たちが行政が動きやすいようにお膳立てをし、行政がうんと言わざるをえないような方向に持って行っていると思います。

実際の反応については、一九八一(昭和五六年)当時、文化財の担当をしていた大野政巳さんが詳しいかと思えます。大野さんは現在、博物館の副館長をされています

が、川越の生き字引です。

大野政巳——一九七五(昭和五〇)年に蔵造りの調査を始めたのですが、指定文化財になると建物の改造ができないということ、当時多くの反対意見がありました。しかし、実際に個々の蔵造りのお宅に行って話をうかがってみると、そこまで強いアレギーはないように感じました。そこで、市の文化財担当では、伝建地区の指定は難しいが、いまできることは何かと考え、個々の建物について、文化財指定を申請しようということになったのです。

氷川神社の当時の宮司、山田さんからアドバイスをいただいで、一件ずつお宅をまわったところ、特に異論もなく指定の申請ができました。

荒牧——お名前が出ました山田先生は一九七五(昭和五〇)年頃のキーマンで、ちに川越市の文化財保護審議会会長になっています。氷川神社の総鎮守の宮司さんに頼まれては断りづらい。やはりここにも祭りの影というか、地域のコミュニティが背後にあるのだと思います。

個人による雑誌づくり

森——次に、藤井さんに。町の雑誌『小江戸ものがたり』は、販売価格三百円でよくやってらっしゃるなと思います。どのような体制で制作されているのでしょうか。子育てとの両立についてもお教えいただけますか。

藤井——『小江戸ものがたり』は森さんの『小さな雑誌で町づくり——「谷根千」の冒険』(晶文社、一九九二)がマニュアルになっておりますので、もともと儲からないことはわかっていました(笑)。川越の企業の方や個人の方に、一回五千円の協賛をいただき、年二回発行しています。当初は第一〇号までは頑張りとうてい意気込んでいましたが、第一一号が二〇〇七年(平成一九)の秋に出版しました。この号からはカラーになりましたので、実は第一二号より値上げさせていたきたいと思います。

この本づくりを続けていたおかげで、二年前から東京国際大学





で非常勤講師をすることにになりました。英語で川越を紹介する冊子づくりの授業です。そちらの収入を制作費にあてているという感じですが、

出来上がった本は自分で自転車に載せて配達、集金をしています。本屋さんには、「なかなか出ない一・二号」などと言われて

いるのですが、無理をしないで、子育てをしながらやっています。

陣内——そもそもタウン誌は、商店街などから広告をとって、安定した形でやっていたのですよね。『銀座百点』『日本橋』など、素晴らしい伝統がありました。そんななかで、森さんたちが初めてスポンサーなしに

丸腰で始めたように思います。

森——いまは名刺広告程度の小さなものももらっていますが、協賛金をもらってタダで配る雑誌とは違いますね。

陣内——そうですね。その世界を切り開いて、それを発展させて、けれども無理をしない(笑)。いいですよ。

——地域の活性化を目指すまちづくり——

森——内田先生にお聞きしたいのですが、地域の活性化をはじめから目標にしているまちには、長浜のようにまちづくり会社をつくって、どんどん物件を取得し、そこで商売をするというまちもあれば、あまり経済性を感じさせないまちもあります。川越の場合はどちらなのでしょう。

私は、このあいだ長浜を見に行ったのですが、少しがっかりしました。全部似たような土産物屋になっていて、しかもはじめから収益のことばかり考えているので、家の持ち主、地主の方が強欲になり、町家の賃料がとんでもない値段に釣りあがっているのです。一方で、タダでもよいのでまちの活性化のためにうちを使っしてほしいという人がたくさんいるまちもあります。まち

づくりの理想は、どう持つべきなのでしょう。また、外部資本はこのまちには入ってこないのでしょうか。それとも、これまでに入ってくるような動きはあったのでしょうか。

内田——外部資本の問題については、例えば仕舞屋があつて、それをどう活用するかというのは、結構難しい問題です。持ち主はお金に困っているわけではないし、変な人に貸してトラブルになるのは嫌だということ、なかなか貸してくれません。そんななかで、まちづくり会社がその役割を担ってはどうかというアイデアも出ています。

偶然縁があり、西武系のセゾンに話をもち込んだことがあります。西武は、駅前に若者向けの「PARCO」をつくり、関西では「つかしん」という新しい商業空間をつくりましたが、むしろ町場に出て来て、一軒一軒の中に入っていたほうがよいのではないか。川越の仕舞屋などを借りて西武が経営するという方法を考えてみてくれなにかと話しました。好意的に受け止めていただきましたが、その後セゾンの体力がなくなり、その話はなくなりました。

陣内——話がなくなつたのは残念ですが、今後実現したら面白そうですね。川越のようなどころであれば、大いにあり得ると思います。銀座に外国のブランドショップが入って来ていますが、彼らは銀座のよさを理解して入って来ているので、そうでない外部の資本が入ってくるのは違うと、銀座の人々もおおかた歓迎しているようです。そういう可能性もあるのだなと思いました。

—— 歴史的建造物の修理・保存・活用 ——

陣内——それではここで、会場からの質問に答えていただきたいと思います。「修復費用は経済的な採算がとれているでしょうか」「《旧鏡山酒造》《旧織物市場》は経済的にどう成立させるのでしょうか」という質問です。

最近では、いわゆる重要文化財は、指定文化財、登録文化財を含めて、かなり大胆に構造補強をしたり、デザインを変えたり、空間を再構成したものも取り入れられています。また一方では、質の高い保存を伝えることも必要だという指摘もあります。コストの問題や使い勝手の問題もある

と思いますが、経済的に採算はとれているのでしょうか。

荒牧——おそらく成立している事例の場合、土地を新たに買ってはいないはずで、住人が自分の家を直している。川越の伝建地区の場合、補助金を使えば、自己資金四百万円で二千万円相当の修理ができます。しかし認定されない部分に関しては、自分で投資しなければならぬこともあり、ますし、店舗としての投資の場合は、自分でなんとかしなければなりません。土地を買うところから始めると割に合いません。

また、《旧鏡山酒造》《旧織物市場》のような建物は、行政が最低限の修理をするのでなんとか成り立っていると思います。行政がそこで商売をしたら、絶対に破綻してしまいます。どこかの第三セクターを見てもそうです。行政が土地と器を提供すれば、修繕費が負担にならないので、おそらくテナントが入っても楽に成立するのではないのでしょうか。賃料にもよるとはいますが、失敗する要素は少ないと思います。

陣内——「将来、蔵が《Fギャラリー》的になっていく可能性はないのか」という質問も来ています。これについてはどうでしょう

うか。

荒牧——あそこにはもともと蔵が建っていたわけではなく空地でした。そこに新しいギャラリーを建てたのです。先ほど紹介した町並み委員会の場で、まちの人と専門家と行政も含めて、施主さん、設計士さんと呼んで議論を積み重ねました。まちの人がこれであつたら、平成の建築として将来に残せるということを認めたわけです。勝手に自分がやりたいデザインを提案していたらまちの人拒否していたでしょう。

建築の表現がいいかどうかはわかりませんが、分棟化、四間×四間のマイクロゾーニング、鉄とガラスとコンクリートからなる素材の活かし方など、すべてまちのルールに則っています。施主の熱意と、設計者の熱意がありました。平成の時代に、平成の表現として一番よいものをつくるべきだということをまちの人々も思っていたからできたのだと思います。ですから《Fギャラリー》のようなものが今後生まれる可能性はかなり少



ないと思います。

内田——《Fギャラリー》については、文化庁の内部でもあれが川越にふさわしいかという議論があったと聞いています。ただ、川越の内部では、住民と付近の商店街で話し合いを重ねたうえで、古い建物を真似たようなものではなくて、ちゃんとデザインしたいという思いがあったということ、行政も一致してはねつけたのだと思います。**陣内**——ありがとうございます。別の方

からは、「伝統的な町並みを保存活用する場合、伝統的な手法で施工ができる職人の養成が重要。それらの補修方法や技術伝承のための規範づくりについてお考えをお聞かせ下さい。私は遠方から職人を呼ぶよりも、地元で職人を集めた方がよいと考えます」との意見がきています。いかがでしょうか。

荒牧——おっしゃるとおり、地元の職人を使うべきだと思います。しかし、はっきり申し上げると、伝統工法は建築基準法では信頼されていません。伝統工法の強度は、大工の腕と材の質によつてすべて異なってくるのですが、建築基準法では計算上出てくる数値で考えてしまっています。

どんな素人がつくっても安全なようにというのが建築基準法です。ですから、法体系をなんとかしない限り、伝統工法を使うことは難しいと思います。しかし、金物による補強よりも伝統技術のしっかりした職人が修理するのが一番だと思います。

陣内——これだけ数多くの修復、再生工事業が行われていると、いままで埋もれていた職人さん、大工さんの技術が再び蘇ってくることはあるのでしょうか。

荒牧——古い建物を修理するにはそれなりの技術が必要です。また、施主がどこまで注意するかですね。昔からの大工さんとの関係が続いている方もいらつしゃいます。関係が切れてしまつているところは問題でしょうね。《旧鏡山酒造》をやつていただいた左官屋さんは、そういう古いものをやりたいということ自分で自分から飛び込んで来てくれました。

——まちづくりと観光——

陣内——では次の質問です。観光に関連していくつかきています。「仕組みはある程度、整つてきたと思いますが、より魅力的なまちにするために、今後必要な取り組み

は何だと思われますか。また、その障害となっているものは何ですか」「海外からの観光客を川越に招き入れるために最も重要と思われることを教えてください。これから国内での獲得競争が厳しくなると思いますが」「川越を訪問する観光客は平均三時間しか滞在しないということですが、これでは川越に経済的利益は期待できないと思います。川越に滞在していただくためには何が必要とお考えでしょうか」。

藤井——観光客を呼び込む、あるいは観光客に宿泊してもらうためにはどうしたらよいのでしょうか。ただいまの時刻は夕方六時です。この時間に一番街の通りで電気がついているのは、本屋さんとNPOが再生させた映画館スカラ座ぐらいです。地元の人でさえ歩いていないのに観光客にそれを求めるのは順序が違うと思います。

観光には大きな観光と小さな観光があります。二〇〇九(平成二一)年三月から、川越はNHKの朝の連続テレビ小説の舞台になります。多くの観光客に観光地として消費されていくのではない、成熟した観光を見つけないけません。大きな観光に流されず、暮らしの歳時記をしっかりと

やっていけば、日本の暮らしを川越で味わうということも充分イベントになると思います。昔の人の知恵が歳時記に上手く組み込まれていると思うので、日本人が日本を体験できるまちになればよいのではないかと思います。

内田——本日の会場であるこの大きな蔵では、時々演奏会などが開かれます。夕方に開催すると、かなりの人がこの付近で食事をしていってくれるそうです。さまざまな文化をいろいろな時間で楽しむことができれば、結果的に川越での生活を味わいに内外の人々がやって来るのではないのでしょうか。

私はこれまで、観光は観光客を優先するよりも、まちの人がまちの空間、生活を楽しむべきで、観光客はおこぼれにありつけばいいと言ってきました。とはいっても、一日一万人もの人が動くわけで、商店の方がそれをいかに活用するかを考えることはやむを得ないなど、年齢を重ねて思うようになりました。けれどもやはり、まちの人がまちの生活を楽しむということが中心ではないかと思っています。

荒牧——お二人の発言のように、日々川越

の人が川越らしい生活をおくることができればそれで充分だろうと思います。それに共感した人が来てくれればよいのであって、物見遊山だけの観光客はあまりいらないうという気がします。川越は、昔からいろいろなところで縁日をやっていました。さまざまな祭事を普段通りやって、普段通りの生活をしていけばいいのです。無理してつくる必要はありません。

陣内——別の方から、「商業、ソフト面のまちづくり規範はありますか」という質問が来ています。いかがでしょうか。

荒牧——一〇年以上も前から商業規範をつくるという話があるのですが、なかなかまとまらないようです。実際、一番街もテナント化し、全国のチェーン店が増えてきました。しかし、そういうお店はチェーン店ではあっても、地域の商店街に入ってもらい、そこで採まれて商店街の一員として活躍していただきたいと思っています。

川越で家を建て直す場合には、町並み委員会にかけます。そこからコミュニティが始まっているのです。お店ができあがると商店街に会員になっていただきます。地域のコミュニティのなかの一品として同じよ

うな活動をしてもらうシステムが、お店を改装する時点から始まっているわけです。今後、観光地化した場所では必ず起きてくる問題だと思っています。

——誇りをもってまちづくりを——

陣内——ありがとうございます。では最後に、森さんからご感想やご意見をいただきたいと思っています。

森——私たちが『谷中根津千駄木』という雑誌をつくったことで、「谷根千」という地名ができ、いまでは観光地のようになっています。しかし私たちは決して観光を目的に始めたわけではありません。地域史を掘り起こして、自分たちのまちの歴史に誇りを持ちたかったのです。

川越同様、私たちもいろいろなところと地域間交流をしています。例えば、石川県の七尾という震災を受けた地域とは、お魚を送ってもらったり、こちらからは本を送ったりという交流をしています。最近では、大正時代の文化財《旧安田邸》で「七尾の花嫁のれん展」を開催しました。私たちのNPOと七尾の語り部の人たちが参加して、合宿状態で過ごしました。その時

は、一週間で五千人以上、かなり意識の高いお客様が来てくださいました。そういう仕掛けを考えていけばいいのではないのでしょうか。荒牧さんの次の代の方にも頑張っていただいたいと思います。

谷根千では最近、持ち主の方が若い人を見込んで場所を安く貸すんですね。そうすると、アーティストが、そこで作品をつくりながら売りながら、時には喫茶コーナーまでつくっています。小さなスペースでもそういうことが家賃五、六万円くらいでやれる。本日は熊本県小国町の方がいらっしゃっているようですが、私は小国に行って感動しました。本当に山の中なので何もないかと思っただけですが、まちは若い人たちがやっている素敵なバーや飲み屋さんがたくさんあったのです。若者が運営して、大人はお金を落としに毎晩通う。そういうことを川越でもぜひやってもらえたらと思います。

—— 未来につなぐまちづくり ——

陣内——どうもありがとうございます。短時間でしたが、本当にいろいろなことを教えていただきました。パネリストの方々

が印象的なことをたくさん言ってくくださったので、ひとつずつご紹介いたします。

荒牧さんには、市民と行政との関係について、市民が行政の尻をひっぱたきながらイニシアティブをとり、行政がそれに動かされてやっていくということを話していただきました。

藤井さんの「日本人が日本人になりにくるまち」というフレーズもいいですね。そういうことをやれそうな舞台、人材、センスを備えたまちは、ほかになかなかないと思います。

内田さんは、「まちの魅力をすべて動員する」ということをおっしゃいました。草野さんが発表されたアルテカルブもそのひとつではないかと思えます。やはりよい建物、よい舞台があるからこそインスタレーションが栄えるわけです。まちの魅力を、少しフェーズを変えながら動員していると感じました。

観光をどのように考えるかについては、「小さな観光」というお話がありました。イタリアにはトレヴィヴィーズという小さなまちがあるのですが、ここには全然観光客がないので、市民が本当に楽しんでいま

す。食べ物もおいしいし、よいバーもある。そしてそれを聞きつけた周辺に住む人たちがやってくる。リピーターがやって来るまちというのは理想だと思います。

また、四季折々の歳時記という話もありました。暮らしのリズムに結びついたイベントがうまく行われている場所に人は集まります。夜はバーで食事をしたり、語らったり。ヨーロッパの最近の例からいうと、民間の家族が自分の家を宿泊所として貸し、朝食だけ出すという、とてもすてきなホスピタリティーを発揮したB&Bという宿泊施設がたくさんできています。これはまだ日本にないので、川越に少しでもできれば、滞在する人も増えていくと思います。そうやって語っていくと本当にきりがありません。ただ肝心なのは、森さんがおっしゃったように、次のジェネレーションにどうバトンタッチするかということだと思います。すでにしつつかあるのかもしれないですが、次世代を育てるということは重要です。上下の世代を超えたダイナミックな交流の場を、こうしたまちづくりのなかで、つくっていくとよいと思います。今日は本当にありがとうございます。」「了」

1986年(研究会)

第1回	江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供	小 木 新 造	歴史民俗博物館
第2回	都市下層社会の形成と変容	内 田 雄 造	東洋大学
第3回	やわらかい都市構造	陣 内 秀 信	法政大学
第4回	考現学の考古学	佐 藤 健 二	法政大学
第5回	明治期の道路(街区)・路地の幅員基準について	石 田 頼 房	東京都立大学

1987年(研究会)

第6回	博覧会と盛り場の明治	吉 見 俊 哉	東京大学
第7回	明治期の繁華街の建築	初 田 亨	工学院大学
第8回	東京の土地・住宅史	長谷川徳之輔	建設経済研究所
第9回	江戸の構成と構造	加 藤 貴	北区教育委員会

1987年(公開研究フォーラム)

第10回	水の都・深川成立史	吉原健一郎	成城大学
第11回	江戸の建築技術	西 和 夫	神奈川大学
第12回	松浦武一郎の一畳敷の書齋	ヘンリー・スミス	コロンビア大学
第13回	徳川の旧家臣のみた、江戸・東京	井 上 勲	学習院大学
第14回	路上から見た江戸・東京	藤 森 照 信	東京大学
第15回	東京書物探索入門	大 串 夏 身	都立中央図書館
第16回	神田のサウンド・スケープの研究	鳥 越 けい子	法政大学

1988年(公開研究フォーラム)

第17回	絵画史料にみる江戸の町	波 多 野 純	日本工業大学
第18回	明治期東京の飲料水販売	松 平 康 夫	東京都公文書館
第19回	江戸城御殿の室内空間について—障壁画下絵による復原—	西 和 夫	神奈川大学
第20回	小江戸・川越のまちとすまい	内 田 雄 造	東洋大学
第21回	現代東京の祝祭	松 平 誠	立教大学
第22回	丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住	岡 本 哲 志	岡本都市建築研究所
第23回	浅草寺の境内・門前世界	竹 内 誠	東京学芸大学
第24回	都心定住を考える—市街地の「町」の現代的意味—	奥 田 道 大	立教大学
第25回	都市社会調査の歴史から	佐 藤 健 二	法政大学
第26回	世界都市東京の光と影	町 村 敬 志	筑波大学

1989年(公開研究フォーラム)

第27回	都市の語り出す物語	宮 田 登	筑波大学
第28回	江戸の都市計画—江戸前島を中心として—	鈴 木 理 生	区立京橋図書館
第29回	江戸の武家屋敷について	北 原 糸 子	
第30回	江戸の被差別・東京の被差別—もうひとつの江戸・東京—	大 串 夏 身	都立中央図書館
第31回	江戸東京の遊び—かるたを中心に—	村 井 省 三	村井かるた館
第32回	森鷗外の都市論	石 田 頼 房	東京都立大学
第33回	東京都心部における空間利用形態	山 下 宗 利	筑波大学

- 第34回 「響き」としての東京の街なみ—神田地区における建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に—
 鳥越 けい子 サウンドスケープデザイン
- 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題 奥田 道大 立教大学

1990年(公開研究フォーラム)

- 第36回 鶴屋南北の幽霊 横山 泰子 国際基督教大学
- 第37回 東京と近代詩 行吉 正一 江戸東京博物館
- 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる—マンションの老朽化と建て替え問題—
 内田 雄造 東洋大学
- 第39回 東京の地価 前田 尚美 東洋大学
- 第40回 江戸の地価 伊藤 好一 関東近代史研究家
- 第41回 江戸のごみ処理 伊藤 好一 関東近代史研究家
- 第42回 都市農業と土地問題 石田 頼房 東京都立大学
- 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京 吉見 俊哉 東大新聞研究所
- 第44回 江戸の名所・王子 加藤 貴 北区教育委員会
- 第45回 上水からみた江戸の都市計画 波多野 純 日本工業大学
- 第46回 江戸名所絵における遠近法 ヘンリー・スミス コロンビア大学

1991年(公開研究フォーラム)

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗 丸山 伸彦 歴史民俗博物館
- 第48回 鋏形蕙斎の江戸一目図屏風 小澤 弘 調布学園女子短大
- 第49回 見立絵というもの 鈴木 重三
- 第50回 江戸住宅事情 片倉比佐子 東京都公文書館
- 第51回 江戸・明治・大正のすまい 平井 聖 昭和女子大学
- 第52回 最近の自治体住宅政策について 林 泰義 計画技術研究所
- 第53回 東京市営住宅事業について 内田 青蔵 東工大附属高校
- 第54回 東京における水際土地利用の変容—日本橋川と隅田川を中心として—
 岡本 哲志 岡本都市建築研究所
- 第55回 江戸から東京への景観構造変化 窪田 陽一 埼玉大学
- 第56回 東京都の都市計画と河川運河 昌子 住江 関東学院大学
- 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい 内田 雄造 東洋大学

1992年(公開研究フォーラム)

- 第58回 新宿ヤミ市の復原 松平 誠 立教大学
- 第59回 鋏形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」をめぐる
 小澤 弘 調布学園女子短大
- 第60回 芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる— 小木 新造 江戸東京歴史財団
- 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動 鈴木 栄一 千代田区議員
- 第62回 近代演劇人による伝統の発見 横山 泰子 国際基督教大学
- 第63回 博覧都市江戸東京 吉見 俊哉 東大新聞研究所
- 第64回 読売から新聞まで GERALD GROEMER
- 第65回 音の風景と近代の忘れもの—大分県竹田市瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる—
 鳥越 けい子 サウンドスケープ機構
- 第66回 三越百貨店が演出した文化生活 初田 亨 工学院大学
- 第67回 ヴェネツィアの経済空間—交易・市場・職人— 陣内 秀信 法政大学

第 68 回 都市のまつり 宮 田 登 筑波大学

1993 年 (公開研究フォーラム)

- 第 69 回 江戸、初期の土地問題 吉原健一郎 成城大文学
第 70 回 江戸勤番武士の生活 竹内誠 東京学芸大学
第 71 回 江戸のおんな 杉浦日向子 江戸風俗研究家
第 72 回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合— 加藤仁美 跡見学園短大
第 73 回 新説・日本近代住宅史 藤森照信 東京大学生研
第 74 回 幻の東京オリンピックと万博 磯村英一 東京都立大学
第 75 回 東京市社会局と都市社会調査 佐藤健二 法政大学
第 76 回 近代における東京の都市庶民住居の発展 江面嗣人 文化庁文化財
第 77 回 江戸の町と京都の町 小川保 清水建設(株)技研
第 78 回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる— 伊藤毅 東京大学
第 79 回 谷中墓地をめぐる 森まゆみ 谷根千工房

1994 年 (公開研究フォーラム)

- 第 80 回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地— 八木澤壮一 東京電機大学
第 81 回 葬式のフォークロア 宮田登 筑波大学
第 82 回 東京—極集中と今後の課題—より豊かな都市空間をめざして—
..... 東郷尚武 東京市政調査会
第 83 回 東京都政の 50 年 大串夏身 昭和女子大短大
第 84 回 博物館の住宅展示を考えて—一人々は生活史をどうみるか— ジョルダン・サンド
第 85 回 都市空間とセクシュアリティ 上野千鶴子 東京大学
第 86 回 メディアとしての絵はがき 佐藤健二 法政大学
第 87 回 メキシコシティと東京の間 吉見俊哉 東大社会情報研
第 88 回 北京と東京の比較都市論—歴史的空間構造と近代化のメカニズム—
..... 陣内秀信 法政大学
第 89 回 川越のまちなみの復元 内田雄造 東洋大学
..... 浅井賢治 東洋大学
第 90 回 河鍋暁斎と江戸東京 小木新造 江戸東京歴史財団

1995 年 (公開研究フォーラム)

- 第 91 回 都市と美術館と絵画—パリ・ロンドンと日本— 小澤弘 調布学園女子短大
第 92 回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺 丸山伸彦 歴史民俗博物館
第 93 回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料 天野隆子
第 94 回 歌謡曲のなかの東京 大串夏身 昭和女子大短大
第 95 回 江戸の着物文化 田中優子 法政大学
第 96 回 江戸東京学への招待試論 小木新造 江戸東京博物館
第 97 回 「境内」からみた三都—三都の比較都市史序説— 伊藤毅 東京大学
第 98 回 盛り場考 神崎宣武
第 99 回 近世都市空間の創出過程について—都市構築の基盤材調達の見点から—
..... 北原糸子
第 100 回 江戸東京学への招待—生活の舞台としての都市空間— 小木新造 江戸東京博物館
..... 陣内秀信 法政大学
..... 高階秀爾 国立西洋美術館

司 会 田 中 優 子 法政大学
内 田 雄 造 東洋大学

第 101 回 都市の民俗学—色・音・匂の変化— 小林 忠 雄 歴史民俗博物館

1996 年(公開研究フォーラム)

- 第 102 回 同潤会柳島アパートの生活— 大 月 敏 雄 東京大学
 第 103 回 同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について— 佐 藤 滋 早稲田大学
 第 104 回 住文化の体験の場としての博物館— 小 澤 紀 美 子 東京学芸大学
 第 105 回 縁切寺—東慶寺と満徳寺— 高 木 侃 関東短期大学
 第 106 回 考古学からみた江戸と他都市との比較— 小 林 克 歴史文化財団
 第 107 回 日本パノラマ館と凌雲閣—浅草の 2 つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか—
 平 井 聖 昭和女子大学
 第 108 回 震災復興(大銀座)の街並みから— 石 川 幸 恵 清水建設(株)
 第 109 回 明治初年の大火と貧富分離論— 石 田 頼 房 工学院大学
 第 110 回 戦災復興計画の理念とその遺産—東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって—
 越 沢 明 長岡造形大学
 第 111 回 関東大震災後の東京の住宅地形成について— 藤 岡 洋 保 東京工業大学
 第 112 回 カフェーと喫茶店— 初 田 亨 工学院大学

1997 年(公開研究フォーラム)

- 第 113 回 橋のアーバン・デザイン— 伊 東 孝 日本大学
 第 114 回 城下町大坂、江戸の都市設計— 篠 原 修 東京大学
 第 115 回 東京都都市景観マスタープラン—新たな景観まちづくりへの展開—
 布 施 六 郎 東京都
 第 116 回 江戸・東京の湯屋— 松 平 誠 女子栄養大学
 第 117 回 江戸城から宮城へ—皇居を中心とする都市空間の変容— 米 田 雅 子
 第 118 回 江戸藩邸物語— 加 藤 貴
 第 119 回 建築家、佐藤功一と都市への視線— 米 山 勇 江戸東京博物館
 第 120 回 明治の歌謡にみる東京— 大 串 夏 身 昭和女子大短大
 第 121 回 「江戸名所図会」と長谷川雪旦— 鈴 木 章 生 江戸東京博物館
 第 122 回 町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水—絵図・図面にみる江戸の都市施設—
 波 多 野 純 日本工業大学
 第 123 回 参勤交代—巨大都市江戸のなりたち— 原 史 彦 江戸東京博物館

1998 年(公開研究フォーラム)

- 第 124 回 寛永 13 年江戸城外堀普請と周辺地域の変化— 栩 木 真 新宿歴史博物館
 第 125 回 関東・東国の部落史—部落史の「見直し」論議に引きつけて— 藤 沢 靖 介 部落解放研究所
 第 126 回 明治期の被差別部落—都市東京と植民地主義の言説編制から— 友 常 勉 部落解放研究所
 第 127 回 関東大震災と朝鮮人虐殺事件— 石 田 貞 埼玉同和教育協
 第 128 回 原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む— 柳 瀬 有 志 法政大学
 第 129 回 横浜市の市営住宅事業について— 水 沼 淑 子 関東学院女子短大
 第 130 回 目白文化村とその変貌— 八 木 澤 壮 一 東京電機大学

1998 年(一般公開フォーラム)

- 第 131 回 地域学の明日を考える— 小 木 新 造 江戸東京博物館

		橋 爪 紳 也	京都精華大学
		結 城 登 美 雄	まちづくりプランナー
		森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰
	司 会	陣 内 秀 信	法政大学
第 132 回	江戸歌舞伎の特色	服 部 幸 雄	日本女子大学

1999年(一般公開フォーラム)

第 133 回	東京・明治大正の人口問題	小 木 新 造	江戸東京博物館
第 134 回	江戸東京フォーラムと住総研 伝統的な履歴書	大 坪 昭	住宅総合研究財団墨壺 住宅総合研究財団
第 135 回	「ふるさと」としての東京深川—ある個人的な感想—	川 田 順 造	広島市立大学
第 136 回	都市と農村の蜜月時代—近郊農業の展開と流通の変化—	江 波 戸 昭	明治大学
第 137 回	永井荷風と東京	湯 川 説 子	江戸東京博物館
第 138 回	地域雑誌からみた町	立 壁 正 子	『ここは牛込、神楽坂』 野口由紀子 『武蔵野から』 大野順子 町雑誌『千住』
		司 会 森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰

2000年(一般公開フォーラム)

第 139 回	「ニュースの誕生」展と江戸東京学	木 下 直 之	東大総合研究博物館
		北 原 糸 子	東大社会情報研究所
		佐 藤 健 二	東京大学
		吉 見 俊 哉	東大社会情報研究所
		富 澤 達 三	神大常民文化研究所
第 140 回	長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」	西 和 夫	神奈川大学
		千 野 香 織	学習院大学
		波 多 野 純	日本工業大学
第 141 回	☆大久保にみる都市の国際化	稲 葉 佳 子	(有)ジオ・プランニング
第 142 回	☆神田多町—震災復興の「まち」から見えるもの—	小 藤 田 正 夫	千代田区まちづく公社
第 143 回	築地・横浜の外国人コミュニティ	森 田 朋 子	お茶の水女子大学
第 144 回	江戸東京フォーラムの果たした役割	太 田 博 太 郎	日本学士院
		小 木 新 造	江戸東京博物館
		陣 内 秀 信	法政大学
第 145 回	遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—	波 多 野 純	日本工業大学
		後 藤 宏 樹	千代田区四番町資料館
		栩 木 真	新宿歴史博物館
		司 会 小 林 克	江戸東京博物館

2001年(一般公開フォーラム)

第 146 回	江戸の見世物	川 添 裕	見世物文化研究所
第 147 回	☆千住の町おこしと地域博物館の取り組み	所 理 喜 夫	足立区立郷土博物館
		荒 居 康 明	町並み研究家
		波 多 野 純	日本工業大学
		大 野 順 子	町雑誌『千住』
第 148 回	祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成—神田祭りを主な素材として—		

第 149 回	江戸の女性と布橋灌頂会—立山博物館の試み—	伊藤裕久	東京理科大学
		鳥越けい子	聖心女子大学
第 150 回	都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—	米原寛	立山博物館
		波多野純	日本工業大学
		初田亨	工学院大学
		大月敏雄	東京理科大学
		森まゆみ	作家・「谷根千」主宰
		東孝光	建築家・千葉工大
		司 会 陣内秀信	法政大学

2002 年(一般公開フォーラム)

第 151 回	モダン都市・東京の読書空間—読書装置の 1920～30 年代—	永嶺重敏	東大資料編纂所
		佐藤健二	東京大学
第 152 回	近代皇族邸宅にみる和風と洋風	水沼淑子	関東学院大学
		小沢朝江	東海大学
第 153 回	江戸と怪談と怪異空間	内田忠賢	お茶の水女子大学
		コメンテータ・司会 横山泰子	法政大学
第 154 回	☆向島の成立と下町気質	佐原滋元	向島百花園茶亭さほら
第 155 回	関一と近代大阪の再創造	ジェフリー・ヘインズ	オレゴン大学
		コメンテータ 石田頼房	東京都立大学
		” 内田雄造	東洋大学
		通 訳 ビュースト	東京大学

2003 年(一般公開フォーラム)

第 156 回	大江戸八百八町と日本橋界限—『熙代勝覧』の世界—	コメンテータ 波多野純	日本工業大学
		” 森まゆみ	作家・「谷根千」主宰
		” 竹内誠	江戸東京博物館
		” 市川寛明	江戸東京博物館
		コーディネータ 小澤弘	江戸東京博物館
第 157 回	もう一つの東京の近代住宅史：私論	山口廣	日本大学
第 158 回	江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー—	基 調 講 演 全相運	韓国科学技術翰林院
		コメンテータ 川田順造	神奈川大学
		” 高田誠二	北海道大学
		” 中村士	国立天文台
		” 橋本毅彦	東京大学
		” 波多野純	日本工業大学
		” 渡邊晶	竹中大工道具館
		コーディネータ 小澤弘	江戸東京博物館
		” 鈴木一義	国立科学博物館
第 159 回	☆日本近代の集合住宅の原点としての「下宿屋」	堀江亨	日本大学
		松山薫	東北公益文科大学
		高橋幹夫	文化誌研究家
第 160 回	幻燈から映画へ—転換期の映像メディア—	岩本憲児	早稲田大学
第 161 回	都市への記憶：「満州国」建築へのまなざし	古賀由起子	コロンビア大学

2004年(一般公開フォーラム)

第162回	音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉	秋山宏	日本大学
第163回	江戸東京に於けるスラムの発生と変容	内田雄造	東洋大学
		コメンテータ 加藤貴	早稲田大学
第164回	☆銀座の歴史と都市文化を考える	岡本哲志	岡本都市建築研究所
第165回	よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—		
		基調報告 谷川章雄	早稲田大学
		〃 波多野純	日本工業大学
		事例報告 後藤宏樹	千代田区四番町資料館
		〃 佐藤攻	東京都埋蔵文化財センター
		〃 松尾信裕	大阪市文化財協会
		〃 扇浦正義	長崎県都市整備推進課
		司会 小林克	江戸東京博物館

2005年(一般公開フォーラム)

第166回	江戸の養生所	安藤優一郎	江戸・都市史研究家
		コメンテータ 勝木祐仁	文化女子大学
第167回	再考—小木新造の江戸東京学—	陣内秀信	法政大学
		パネリスト 波多野純	日本工業大学
		〃 内田雄造	東洋大学
		〃 吉見俊哉	東京大学
		〃 横山泰子	法政大学
		司会 小澤弘	江戸東京博物館
第168回	☆水上から江戸東京をみる—一品川の水辺と宿場—	陣内秀信	法政大学
		波多野純	日本工業大学
第169回	☆下北沢の魅力—日本型都市再生のあり方を探る—	パネリスト 小林正美	明治大学
		〃 大木雄高	ジャズ・バー Lady Jane
		〃 吉見俊哉	東京大学
		司会 陣内秀信	法政大学

2006年(一般公開フォーラム)

第170回	東京エコシティ—新たなる水の都市へ—	岡本哲志	岡本哲志都市建築研究所
		ロドリック・ウィルソン	法大エコ地域デザイン研究所
		石川初	ランドスケープ・アーキテクト
		田島則行	建築家・テレデザイン
		渡辺真理	建築家・法政大学
		久野紀光	建築家・東京工業大学
		パネリスト 猪野忍	建築家・法政大学
		〃 小林博人	建築家・慶応大学
		司会 陣内秀信	法政大学
第171回	大阪くらしの今昔館—「体感する」博物館活動—	谷直樹	住まいのミュージアム
		司会・コメンテータ 小澤弘	江戸東京博物館
第172回	日本の町家—京町家と卯建の意味—	大場修	京都府立大学

2007年(一般公開フォーラム)

- 第173回 ☆杉田玄白と小塚原の仕置場……………野尻かおる 荒川ふるさと文化館
 亀川泰照 荒川ふるさと文化館
 コメンテータ 土居浩 ものづくり大学
 司 会 小林克 東京都写真美術館
- 第174回 ☆地域資料としての『近代建築』……………川口明代 文京ふるさと歴史館
 北田建二 文京ふるさと歴史館
 司 会 森まゆみ 谷根千工房
- 第175回 ^{みやこ みやこ} 都と京—東京と京都の人と暮らし—……………酒井順子 『都と京』著者
 陣内秀信 法政大学
 司 会 横山泰子 法政大学
- 第176回 巢鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巢鴨地域—……………秋山伸一 豊島区立郷土資料館
 成田涼子 豊島区教育委員会
 高尾善希 東京都公文書館
 市川寛明 江戸東京博物館
 岩淵令治 国立歴史民俗博物館
 司 会 小林克 東京都歴史文化財団
- 第177回 発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性……………谷田有史 たばこと塩の博物館
 毎田佳奈子 港区教育委員会
 水本和美 四番町歴史民俗資料館
 仲光克顕 中央区教育委員会
 波多野純 日本工業大学
 司 会 小林克 東京都歴史文化財団

2008年(一般公開フォーラム)

- 第178回 チャレンジCGプロジェクト「江戸の町並みをつくる」……………高橋時市郎 東京電機大学
 勝村大 東京電機大学
 小澤弘 江戸東京博物館
 波多野純 日本工業大学
 司 会 市川寛明 江戸東京博物館
- 第179回 幻の日本万国博覧会—月島の地域学—……………増山一成 中央区教育委員会
 伊東孝 日本大学
 コメンテータ 陣内秀信 法政大学
 司 会 吉見俊哉 東京大学
- 第180回 ☆川越のまちづくりと歴史的建造物の活用……………内田雄造 東洋大学
 荒牧澄多 NPO川越蔵の会
 藤井美登利 川越むかし工房
 コメンテータ 森まゆみ 谷根千工房
 司 会 陣内秀信 法政大学

開催案内

フォーラムは、江戸東京フォーラム委員会で企画を検討し、年3～4回開催しています。
開催案内は、インターネットの当財団ホームページでご覧になれます。

URL = <http://www.jusoken.or.jp/edotokyo.htm>

発刊物など

研究論文・報告

- ①「江戸東京、生活空間の研究」研究所報No.14/A4判19ページ/住宅総合研究財団/1988
- ②「江戸東京フォーラム委員会活動」(1)～(7) 研究年報No.18～24/A4判51ページ/
住宅総合研究財団/1992～1998
- ③「『江戸東京』時代の生活と政治」小木新造/A5判92ページ/住宅総合研究財団/2005.8

一般書籍

- ①「江戸東京を読む」A5判295ページ/筑摩書房/1991
- ②「江戸東京学への招待(1)文化誌篇」B6判290ページ/日本放送出版協会/1995
- ③「江戸東京学への招待(2)都市誌篇」B6判282ページ/日本放送出版協会/1995
- ④「江戸東京学への招待(3)生活誌篇」B6判273ページ/日本放送出版協会/1996
- ⑤「江戸東京学」小木新造/A5判225ページ/都市出版/2005

記録小冊子

- ①「地域学の明日を考える」B5判59ページ/住宅総合研究財団/1999
- ②「地域雑誌からみた町」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2000
- ③「遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2001
- ④「都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—」B5判44ページ/住宅総合研究財団/2002
- ⑤「江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー—」B5判55ページ、カラー/
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」総括班/住宅総合研究財団/国立科学博物館/
東京都江戸東京博物館/2004
- ⑥「よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—」B5判42ページ/住宅総合研究財団/2005
- ⑦「東京エコシティ—新たなる水の都市へ—」B5判46ページ/住宅総合研究財団/2006
- ⑧「都と京—東京と京都の人と暮らし—」B5判40ページ/住宅総合研究財団/2007
- ⑨「地域資料としての『近代建築』」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑩「巢鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巢鴨地域—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑪「杉田玄白と小塚原の仕置場」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑫「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑬「幻の日本万国博覧会—一月島の地域学—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑭「川越のまちづくりと歴史的建造物の活用」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009

住宅総合研究財団機関誌「すまいろん」のページ

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回のフォーラムを開催しました。翌年度から、当財団の活動として、現在に至っています。

フォーラムは委員会で企画がつくられます。委員は、現在、下記の通りです。主な参加者は、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等に関心ある方で、どなたでも参加することができます。自由で活発な議論や意見交換が行われます。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、一言で言えば、東京の個性を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明する方法は、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市に関心を持つ人たちが、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の基盤を持つこと、すなわち、学際的に展開をすることです。このような立場で、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを考えます。

フォーラムは、企画の基本柱に基づいて立案を

しています。その基本柱は、①「記憶」としての都市を考察する、②「地域研究」を掘り下げる、③環境と都市の関係を歴史的視点で考察する、の3つです。

21世紀は「都市の時代」です。全世界の人口の大半が都市に住むという、地球規模での都市化が進みつつあります。その反面、環境破壊が今日の大きな問題として浮上しました。都市景観が個性を失い、画一化していることも気になります。

そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、引き続き東京を舞台に総合的な都市研究と、その成果の市民への還元に取り組みます。

フォーラム委員

委員長

陣内 秀信 法政大学デザイン工学部建築学科

委員(50音順)

稲葉 佳子 法政大学大学院工学研究科

入江 彰昭 東京農業大学短期大学部環境緑地学科

小沢 朝江 東海大学工学部建築学科

小澤 弘 (財)東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館

小林 克 (財)東京都歴史文化財団

波多野 純 日本工業大学生活環境デザイン学科

森まゆみ 作家

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環

川越のまちづくりと歴史的建造物の活用

2009年10月1日発行 ©

編集 住総研江戸東京フォーラム委員会

協力 東洋大学工学部現代GP

川越市教育委員会

NPO法人 川越蔵の会

校正+DTP 有限会社 メディア・デザイン研究所

発行人 岡本宏

発行所 財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目29番8号

Tel.03-3484-5381 Fax.03-3484-5794

URL: <http://www.jusoken.or.jp>

住宅総合研究財団について

当財団は1948(昭和23)年、戦後の著しい住宅不足が重大な社会問題となっていた時期、これに憂慮した故清水康雄(当時清水建設社長)の提唱により、東京都の許可を得て設立された公益法人です。

住生活に貢献しうる研究の委託・助成事業を中心に、「住」をめぐるフォーラムの開催、機関誌『すまいろん』の発行等、学問と実践をつなぐ普及活動を行っています。また、「住」に関する専門図書室を公開しています。

2008年の創立60年を機会に、研究成果の市民への還元とともに、市民に学び場を提供する公益法人として社会貢献を果たす所存です。